

研究動向

教父研究会——紹介と現状

教父研究会は1976年秋に設立され、1977年より現在に至るまで、年4回の定例研究会を中心にして研究活動を行ってきた。教父の神学・哲学の研究、また広く教父から発する問題の諸相の研鑽を目的とする。教父の思索はヘレニズムとヘブライズムの接点に位置し、キリスト教神学を創成し、その後のヨーロッパ神学・哲学の基盤となった。教父の神学・哲学の源泉に汲むことはキリスト教が古代世界に成立した際の原初の生命の息吹きを取り戻すことになる。それはおよそ人間における神学・哲学の言語の可能性を探ることであり、ヨーロッパの伝統に汲みながら、ヨーロッパの限界を越えて、現代の地球化時代を生きる新しい神学・哲学の可能性を創造的に追求することでもある。本研究会はこのような視点に立って研究活動を行ってきた。

本研究会の趣旨に賛同し、討論に参加して、本研究会の活動を担うものを会員とする（会員数、現在79・内、会友31名）。運営委員は今道友信、泉治典、K・リーゼンフーバー、加藤信朗であり、内、加藤を代表とする。1991年の第55回研究会までは東京都立大学哲学研究室に、以後現在まで聖心女子大学哲学研究室に事務局が置かれている。

1993年度から、定例研究会の発表を当日の討論と共に掲載する機関紙として、『パトリスティカー教父研究—』（新世社刊、創刊号、139+(6)頁、1994年10月刊行）を発刊している。

最近数年間の研究会は以下のとおりである。

- 第55回 1991. 1. 26 加藤信朗「アウグスティヌスの三位一体論（続）」
- 第56回 1991. 4. 13 井上 忠「聖書の言語」
- 第57回 1991. 6. 29 小高 毅「オリゲネスのパウロ解釈—ローマ書の「予定」と「選び」を中心にして—」
- 第58回 1991. 10. 12 宮内久光「行為について」
- 第59回 1992. 1. 25 塩倉惇子「エイレナイオスの聖霊論」

- 第60回 1992. 4. 18 泉 治典「Athanasius. *Epistula ad Serapionem* より
—三位一体論・受肉論・聖霊論の内的連関をめ
ぐって」
- 第61回 1992. 7. 4 N. B. McLynn「Ambrose, Theodosius and the Council
of Constantinople (381)」
- 第62回 1992. 10. 17 荒井洋一「*Soliloquia* における祈りと探究」
- 第63回 1993. 1. 23 岡野昌雄「聖書解釈の多義性と真理性—『告白』の創世記
解釈をめぐって」
- 第64回 1993. 4. 17 加藤 武「隠喩の生成—Ambrosius, *Hymnus I* から
Prudentius, Liber Cathemerion I へ」
- 第65回 1993. 6. 19 渡部菊郎「トマス・アクィナスにおける摂理と人間の自由
—『真理論』第二問, 第十二項—」
- 第66回 1993. 10. 2 野町 啓「フィロンの聖書解釈の側面」
- 第67回 1993. 12. 4 秋山 学「アレクサンドリアのクレメンスにおける古典学
の変容—アポカタシスの視点から」
- 第68回 1994. 4. 16 清水哲郎「アルクイヌスとフレデギス—文法学・論理
学・神学をめぐって—」
- 第69回 1994. 4. 16 熊田陽一郎「ディオニシオス・アレオパギテースにおける
新プラトンの言語とキリスト教的言語—『神
名論』第二章を中心に—」
- 第70回 1994. 10. 8 今道友信「教父研究の現在」
- 第71回 1995. 1. 28 荻野弘之「〈始まり〉の問いとその行方—「ヘクサメロン」
の西と東—(Basileios - Ambrosius - Augustinus)」
- 第72回 1994. 4. 15 中川純男「ことばと真理—アウグスティヌス『教師論』に
おける問題の所在」
- 第73回 1994. 6. 17 泉 治典「アリウスとアリウス主義再考」

(加藤 信朗)
